

初出勤した山口は事務所で入職手続きを済ませると、施設長のもとに行くように言われた。施設長室のドアはチーク材のダークブラウンで重厚感を漂わせていた。山口はドアをノックするとドアを開けた。「失礼します」

施設長室に入った山口は部屋全体を見渡した。部屋の色調はドア同様にチーク材のダークブラウンで統一されており、大型の木製キャビネットとレザー生地の応接ソファは上品な光沢を醸し出している。しかし、この部屋に置いてある二つのデスクはグレー色のスチール製で、まるで通販で安く購入しかのようなものに見え、部屋の調和に違和感を与えている。

「ようこそ」上井が言った。彼女は部屋の奥にあるデスクの前に立ち、笑顔で山口を迎え入れた。そして山口が部屋を見渡している姿を見ると言った。「立派な部屋でしょ、でも私にはもったいないわ。さっ、今日からよろしくお願ひしますよ。一緒に頑張っていきましょう」そう言うとデスクを指した。「これがあなたのデスクです。事務所にはスペースがなくてここに決めました」

山口は不意打ちを食らったかのように、目を丸くして上井を見た。この重役室の見本みたいな部屋に俺のデスクがあるのか。息が詰まるぞ。「まさかここに私のデスクが置かれるとは思っていませんでした」

上井は笑顔を崩さずに言った。「仲良くしましょ。それにそばにいたら話しやすいしね。私も最初この部屋の雰囲気には違和感を持ったけれど、じきに慣れるわよ」

「ええ」いや、無理だ。

「まず介護長にしてもらいたいことは、この施設の把握です。就業規定や運営規定、各マニュアルなどに目を通してください。全てのファイルはこのキャビネットにあります」

「分かりました。でも、まずは各フロアを回ってきます。ファイルを確認するのはその後でよろしいでしょうか」山口はこの重役室のような息苦しい環境から早く抜け出したかった。

「ええ、いいですよ」

山口は作り笑顔を見せ、頭を下げると施設長室を後にした。

山口は二階に行き、廊下から食堂の方を見ると、利用者の朝食が済み、職員が利用者をトイレに連れて行く姿が目に入った。トイレ誘導の時間か。

その時、食堂の中から「エリーゼのために」の曲が流れ始めた。山口は音楽が聞こえる方に目を向けた。目を向けた先には、女性利用者が椅子から腰を浮かし始め、立ち上がる

うとしていた。山口がその利用者に近づこうとすると、介護職員が女性利用者のそばに近づいてきた。その職員は昨日見学した際に見た職員だった。食事介助で利用者の口に椀子そば。

「竹内さん、どうしたの」職員は女性利用者の竹内の身体を押さえ座らせた。そして椅子の背もたれにあるチェアセンサーのリセットスイッチのボタンを押して音楽を止めた。

「トイレに行きたいの」竹内は力ない声で言った。

「さっき行ったばかりでしょ」

「行ってないわ……もうでそうなの」

「さっき職員と一緒に行ったの。だからもう出ないですよ」

「ずっと行ってないのに……」

「行ったの。だから立っちゃだめ、座ってて」そう言うと職員は竹内のそばから離れて行った。

山口は職員が離れて行くのを目で追いながら職員の言葉に耳を疑いながら思った。あの職員は自分が発した言葉、座っててがスピーチロックにあたると分かっていないのか。その職員はサービスステーションに入り、流し台で利用者が使ったコップを洗い始めた。山口は職員のそばに近づいた。

「お疲れ様です」山口は職員に言った。

職員はコップを洗う手を止め、山口に顔を向けた。彼女の目は初対面の山口に探るような視線を送っていた。

「今日入職した介護長の山口です」山口は口元に笑みを浮かべながら言った。

「はじめまして」職員の表情がゆるみ、身体を山口にむけた。「お疲れ様です。日野といいます。よろしく願いいたします」軽く会釈した。

「今の時間は何をしているのかな」

「食事が終わり、トイレ誘導の時間になります」

「そう。ところで、さきほどセンサーが鳴った利用者さんは、頻繁にトイレに行こうとするのかな」山口が尋ねた。

「ああ、竹内さんですね」日野はその利用者に顔を向けた。「ええ、そうなんです。認知症でトイレに行ったばかりなのに、そのことをすぐ忘れちゃって、また行こうとするんです。竹内さんは歩けますが、かなり歩行が不安定で転倒するリスクが高いんです。歩行時は必ず職員の手引き歩行が必要な人です」

「そうなんだ。でも記憶障害によってトイレに行ったことを覚えていないなら、トイレに行きたがるのは自然なことじゃないかな」

日野は山口に顔を戻した。「尿意を感じているかも疑問なのに、ただ行かなきゃと思っていただけですよ」

「そして立ち上がり、一人でトイレに行こうと歩き始める」

「ええ」

その時、日野の視界に竹内が腰を浮かそうとする動作が目に入った。日野はすぐにカウンターに近づくと、カウンター越しに竹内に言った。「竹内さん！ 駄目！ 立たないで！」

竹内は日野のややきつめな口調にいくぶん驚き、浮かそうとした腰を元に戻した。

山口は日野を見ながら思った。その言葉はスピーチロック、言葉による身体拘束だぞ。「すぐにトイレに行きたがるのは、頻尿が原因かもしれない。また本人の思い込みにしてもトイレに行きたいという利用者の思いを尊重するとしたら、それを止めることで本人の意思を抑制しているとは思いませんか」

山口を見る日野の目が睨むような目つきになった。日野は大きくため息をついた。あたかも山口がここの現状を何も分かっていないことをアピールしているように。「私たち現場職員は竹内さんばかりに関わっている余裕はないんですよ」日野は現場職員の言葉を強調して言った。

山口は日野の目が自分に訴えているように感じた。あなたは現場職員の苦労を何も理解してない管理職だからね。

その時、再び竹内が立ち上がり、アラームが鳴り始めた。

「まったくもう」日野が唸るように言った。

「私がトイレまで一緒に行きましょう」山口は日野が動く前に言った。

「認知症だからトイレに行ったことを憶えてないだけです。どうせ行っても尿はできません。時間の無駄」

どうせでないだと、山口は心の中で言い返した。それはあなたの根拠のない決めつけだ。山口は敢えて穏やかな口調で日野に話しかけた。「行かなければ分かりませんよね。でも行くことで本人は安心する」

「連れて行くと、調子に乗るだけです。言えば連れて行ってくれるって」

そして業務の進行が妨げられる、だろ。山口は声に出さずに言った。山口は利用者のも

とに歩き始めた。背後から日野の言葉が聞こえてきた。「調子に乗っちゃうわ」

山口は竹内の手を取ってトイレ行くことを伝えた。尿がでるでないが一番の問題じゃない。本人が苦痛やストレスを感じない環境をいかに作るかを意識する事が必要なんだ。

山口の手を握りながら歩き始めた竹内が山口に言った。「ありがとう。ずっと我慢していたのよ」

「そうですか。間に合って良かったですね」

「はい」竹内の顔から笑顔が出た。

竹内がトイレを済ませ、ドアから出てきた。

「出ましたか」

「ええ。ありがとうございます」

尿が果たしてどれだけ出たかは分からないが、今はそこが問題じゃない。トイレに行けた安心感。それが大事だ。

山口が竹内を連れて食堂に戻ると日野の姿は見当たらなかった。山口が竹内を椅子に座らせた時に、自分を見ている鈴木の様子が目に入った。彼の両手はほうきとちりとりを持っていた。きっと食堂の掃除をしているのだろう。山口は鈴木に近づいた。

「お疲れ様です」鈴木が言った。鈴木は初対面の山口に対して関心の目を向けていた。

「確か君は鈴木君だっけ」

「はい」

山口は鈴木に自分のことを紹介した。

「よろしくお願いします」鈴木が言った。

「鈴木君は新卒で採用されたんだね」

「はい、今年の四月からここで働いています……あの」鈴木は言葉続けた。「日野さんは悪い人じゃないんですよ」鈴木は山口と日野とのやり取りを聞いていた。「自分から竹内さんのところに行って一緒に歌を歌う事もあるんです」

「ああ、分ってる。勘違いしないでくれ、私は彼女を決してとんでもない悪人とは思ってない」彼女は本来の介護観を見失っているだけだ。

「竹内さんはいつもああなんです。トイレに行ったばかりでも行きたいと思ったら我慢できないんです」

「誰でもそうじゃないか、トイレに行きたいと思えば行く」

「でも、認知症の方は尿意がなくてもまた行きたいと思ってしまいますよね」

「また行きたいじゃないよ。竹内さんは行ったことを憶えていないんだから。本人としては、またじゃない」

「あ……確かに」

「じゃあ、どうしようか」

「えっ、どうするって……」鈴木は困惑した表情を見せた。

「トイレに行かなきゃ、本人にそれを思わせないようにするためにはどうすればいいの
か。それを考えていこうよ」

「えーと……」鈴木は視線を下に向けながら考え始めた。「えーと……」

「いやいや、今すぐに答えを出せとは言っていないから。竹内さんの意識を他の何かに向け、トイレを忘れさせるとか。それを皆で考えてみようってこと」山口は笑顔を作った。

その時、介護主任の佐藤が近づいて来た。佐藤は食堂にいる利用者のトイレ誘導をするため食堂に入って来た。そして食堂から職員を呼んでいる声が聞こえた。山口はその声の方に顔を向けると、車いすに座っている女性利用者が佐藤のほうに手を差し出しながら彼女を呼んでいた。

佐藤はその利用者に近づいた。「林さん、どうしました」

「トイレに行きたいの」

「自分で行けますよね」

「もう我慢できないから、連れて行ってほしいの」

「トイレはすぐそこだから行ってください」

「でも」

「ご自分で行けますよね。頑張ってください」

佐藤は林の言葉を聞こうとせず、林のそばから離れ始めた。

「ちょっと」林は佐藤の後ろ姿に向かって言ったが、佐藤は振り返ることはなかった。

佐藤は他の車いすに座っている利用者に近づき、トイレに行きましょうと言い誘導し始めた。佐藤は林のそばを通り過ぎ、トイレに向かって行った。

林は佐藤の動きを見続けていた。その表情は硬く、口を真一文字に結んでいた。やがて林はゆっくりとトイレに進み始めた。

山口は鈴木に言った。「彼女の名前は」

「佐藤介護主任です」

「主任はなぜ連れて行かないんだ」

「自立支援のためです。自分でできることまで支援してしまうと、本人の運動機能が低下するリスクがあったり、また本人に甘えがでてしまうかもしれませんので」

「自立支援？ 本人の機能低下？ 急いでトイレに行きたがっている利用者に手を差し伸ばさないのが自立支援なのか」

「自分でできることは自分でしていただくために、あえて手を出さないんです」

山口は右手で平手を作り、指先を林の方に向けた。「あの方は自分で車いすを進めていたらトイレに間に合わない。だから職員に手を貸してもらおうと思い職員に声を掛けた。これはけっして甘えようとして声を掛けたとは思えない」山口は平手の指先を鈴木に向けた。「しかし職員は誰も手を貸すことはしない。その結果、トイレまで間に合わず失禁してしまった。その時の本人の心情はどうだろう。失禁パットをしているから間に合わなくてもパットが吸収してくれるから大丈夫。さて、自分が言われたらどう感じるかな」

鈴木は山口から視線をそらした。二人の間に沈黙が流れた。

「悲しみや孤独を強く感じるかもね。そして自分の訴えに耳を貸さない職員に信頼することはないだろう」

鈴木はうつむくと、山口の言葉を反芻すると小さく何度もうなづく仕草を見せた。

「林さんはいつもトイレに行くときはあのよう職員に頼んでいるのか」

「いえ、普段は自分でトイレに行きます」

「不安でいっぱい利用者に優しく手を差し伸べる。それが我々の役割じゃないのかな。林さんは頑張れという励ましの言葉を求めているわけじゃない。なぜなら彼女は頑張っトイレに行こうとしたが、間に合わないと思い、助けが欲しくて声を掛けたんだ」

「そうですよね。皆さん頑張った結果ですよ」鈴木は自分に言い聞かせるように言った。「自分、行ってきます！」鈴木は手に持っていたほうきとちりとりを隅に立てかけると急ぎ足で林のそばに行った。鈴木は林の正面に回り、腰を落として自分の目線を林の目線と同じ高さに合わせた。「林さん、トイレに行きましょう」

「連れて行ってくれるの？」

鈴木は満面の笑みを浮かべて言った。「もちろん」

林の表情から笑顔が出てきた。「よかった。ありがとう」

「さっ、急ぎましょう」

山口は鈴木が車いすを押してトイレまで進み始めたのを見つめた。俺たちは黒子だ、主役は利用者であり、それを影で見守っているのが介護職員だ。目の前が暗くなり、進むべ

き道が分からなくなかった時、そっと道を照らすのが俺たちの役割だ。

鈴木が押す車いすがもうすぐトイレに到着しようとする時、トイレまで利用者を誘導していた佐藤がトイレから姿を現すと、林と鈴木の様子が目に入った。

「鈴木君、林さんは一人で行ける人だよ。なんで介助してるの」

「すみません。あの、普段はそうなのですが、間に合わないって言うんで――」

「林さんは間に合わなかったことはないでしょ。鈴木君は優しいからすぐ訴えを何でも聞いちゃうから」

「あ、はい……」

「次からは、自分で行ってもらうようにね。自分でできることは自分でしてもらって」佐藤はそう言うと、山口の視線を感じたのか、山口の方に目を向けた。その目は山口を詮索する眼差しだった。

山口は佐藤に近づくと言った。「今日介護長として入職した山口です。私が彼に介助するように言いました」

「佐藤です。このフロアで介護主任をしています」佐藤は山口の言った意味が分からず、怪訝そうな顔で山口を見つめた。

「私が彼に林さんのトイレ誘導をお願いしたんだ」

佐藤はここで山口の言ったことが理解できた。「そうでしたか。介護長、林さんは自分で行ける方です。介助は必要ありません」

「林さん含め誰だろうと間に合わない時は――」

「私、何か間違っていますか」佐藤は山口の言葉を遮るように言った。

「佐藤さん、介護福祉士は心身の状況に応じた介護を意識することが求められている」

「だから、本人が出来ることはケアしません。出来るのに手を出してしまったら、残存機能の活用になりませんし、依存心が強くなる場合もあり得ます。分かりますよね」

山口は思った。分かりますよね、か。いかにも自分の意見が正論であるかのような言い方だ。「専門的視点から見て、運動機能低下を誘発する原因の一つは過度な身体的介助の関わりでしょう。しかし、それが起因になる根拠として、そのような過度な介助が恒常的に行なわれているか行なわれていないか。そして忘れてはいけないことが、その時々を状況判断し、関わりの必要性を客観的、専門的に判断することが求められる。今回の場合は――」

「ですから、職員に周知し統一したケアを実践しているわけです。それを今回のように、

状況を理解されず指示を出していただくと、統一されたケアが崩れてまいります。それは結果的に利用者の為にはなりません。業務にも支障をきたします」佐藤は興奮気味に言い返した。

「あなたの言うことは充分に分かる」俺の言いたいことが分からないのか。

「なら――」

山口は右手を上げ、手のひらを佐藤に向けて話を制止させた。「今回の場合を簡単に言わせてもらおうと」山口はあえてゆっくりと話し始めた。「林さんは膀胱が破裂しそうなくらい、我慢できないんだよ。残存機能がどうこうの問題じゃない。林さんの心理面へのアプローチが必要じゃないかな。林さんの不安な気持ちに対応することが優先だよ。これが心身の状況に合わせた介護だよ」

佐藤が言い返し始めたが、山口は彼女の言葉を跳ね返えすように言葉を続けた。「人としてどう思うか、だよ」

山口は佐藤がこれ以上興奮しないよう自分の感情を抑え、冷静な口調で話したが無駄だった。佐藤の顔は赤くなり始め、誰が見ても怒り心頭なのが感じとれるほどだった。

「ちょっといいかしら」山口の背後から女性の声が聞こえてきた。

山口が振り返ると女性利用者が立っていた。

「いつまで廊下の真ん中で言い争っているの。このままじゃ通れなくて渋滞になるわよ」

「ああ、すみません」山口は廊下の端に移動した。

「ごめんなさい、小早川さん」佐藤の声は苛立ちの感情を抑えていたため、硬い口調になっていた。

利用者の小早川はゆっくりと歩き始めたが、すぐに足を止め、山口に顔を向けた。「あなた、お名前は」

「山口です」

「そう、山口さんね。覚えておくわ」そう言うと、再び歩き出した。「私も膀胱が破裂しそうだわ」小早川はトイレに入って行った。

佐藤が山口を鋭い目つきで睨んだ。「トイレ誘導が止まっています。業務を続けてよろしいでしょうか」

「どうぞ」

しかし佐藤はその場を離れず、山口を睨み続けていた。

「どうぞ、行ってください」山口が繰り返した。「それとも私に何か言いたいことで

も」

「あなたの言っていることは理想論です」佐藤が吐き捨てるように言うと、山口のそばから離れて行ったが、すぐに足を止めると山口に体を向けた。佐藤の表情は硬かったが、先ほどの怒りをあらわにしたものではなく、どこか悲しみを感じさせるものだった。

山口には彼女がなにか自分に言いたいことがあるのを感じ、彼女の言葉を待った。

やがて佐藤は何も言わず山口に背を向けると歩き出した。

山口はトイレに向かって行く佐藤を見ながらため息をついた。「まいったな」山口はぼそつと言った。佐藤介護主任と日野、俺に対するイメージは決して良いとは言えない。「仕事初日から敵を作ってしまったかな」山口は職員がいるサービスステーションに向かって歩き出した。

トイレの入り口にきた佐藤は日野と出くわした。

日野は佐藤の表情が穏やかでないのに気がついた。「主任、大丈夫。どうしたの」

佐藤はうつむき、日野の言葉は耳に入っていなかった。「私だって……」佐藤は叫びたい衝動を抑えながら言った。「始めは頑張ったわよ。でも……でも……」

「主任？ 大丈夫？」日野は言葉を詰らせる佐藤を見て不安げに言った。

しかし、佐藤には日野の言葉は届いていなかった。佐藤は過去の自分を振り返っていた。彼女は福祉系の専門学校で学び、介護福祉士の試験に見事合格して卒業を迎えた。卒業後は内定をもらっていた今の施設であるすすらんに入職した。入職したての彼女は介護に対して熱い思いを抱いていた。入所者の思いを汲み取り、生き甲斐を感じることができると生活の居場所を提供することこそ自分のミッションと確信して介護業務に臨み始めたのであった。しかし、すすらんの介護現場は、人手不足により日々の業務に対してゆとりをもって取り組む事ができず、常に時間を気にしながら慌ただしく立ち回らなければならず、入所者一人ひとりとゆっくり腰を据えてのコミュニケーションを図ることなどはできなかった。しかし、佐藤は当時の介護主任——今は退職していないが——に自分の思いを何度か語ったことがあったが、いつも返ってくる言葉は、人がいないのにそこまでできないなどのネガティブな言葉だった。また、佐藤と同じ志を持つ職員もいたが、その職員は満足のいくケアをしたいのに、この施設では時間的に難しいというジレンマに追い込まれ退職してしまった。

利用者と膝を突き合せて話す余裕がない状況、佐藤は自分が抱くミッションが時間に追われる介護現場の波に飲み込まれ、現実的なものではないと感じると同時に孤立感に襲わ

れたのである。結果、佐藤は力を発揮するまえに挫けてしまい、その想いを胸の内にしまい込み二度と口に出すことはなかった。

「私のことも知らないで、偉そうに」佐藤の口調は小声ながらではあったが、力強かった。

「主任」日野が佐藤の右腕に触れながら言った。

佐藤は日野がいることに気がついた。

「ねえ大丈夫」日野が心配そうに尋ねた。

「ええ大丈夫よ」

「そうには見えないけど、いったい何かあったの」

佐藤は山口とのやり取りを話した。「ここの現場をまったく理解していないわ。自分の思いだけを現場に押し付けるタイプね」

「同感。私もさっき、あの介護長にケチをつけられたの。」

「え、日野さんも言われたの」

「ええ、私の竹内さんの対応が納得できなかつたみたい。当てつけのように介護長自ら竹内さんの対応をしたんです」大きくため息をついたあと、話し続けた。「オムツ交換でもいいから現場業務に入ってみれば現実がわかるのに。きっと介護長は現場の苦勞を分からないタイプの人よ」

佐藤は山口の経歴を知らなかったが、山口が綺麗事を言っているように感じられた。「ちょっかいを出さないでほしいわ」

「それに」日野は食堂にいる小久保を見ながら言った。「昨日入所した小久保さん。あの人も癖がありそうだわ」

「そうね」佐藤は共感した。「小久保さんの情報を見たけど、彼は東大を卒業した人よ。きっと言葉では敵わないわ。きっと私たちを下に見て、自分の言うことが正しいと思い込むタイプだから対応が難しいでしょうね」

「私はすでに噛みつかれました。確かに対応が難しい人と思います。いずれはもっと色々口を出すと思いますよ。そして私達は振り回されるようになり、結果的に業務が回らなくなるかもです」

「日野さん、みんなに伝えて。あの人に何か言われて困った時は、自分で解決しないで、必ず私に報告するように」

日野はうなずいたあとに言った。「小久保さんにあの介護長。厄介者がなんで増えるの

よ。ほんと、面倒くさいわね」

「お話中のところちょっといいかしら」

佐藤と日野は声が聞こえた方に顔を向けた。そこには利用者の小早川の姿があった。

「小早川さん、どうされましたか」佐藤が言った。

「洗面所のペーパータオルがなくなってしまったの。もし面倒くさくなければ補充をお願いね」そう言うと笑みを浮かべた。